環流丘陵地帯における空間の構成とその構成要素に関する研究

徳島大学　　学生員　○北村征也
徳島大学大学院　正会員　　真田純子

１．はじめに

私達の住んでいる日本は、その国土の８割近くが山地であり、祖先たちは残りの３割にも満たない、盆地、谷、平野などの平地に住みついてきた。山をくずす、谷を埋めるなどの技術のない時代、人々の住む場所は、地形の影響を大きく受けていたと考えられる。当時の人々は、山岳信仰などに見られるように、自分達の住んでいる地域の地形を読み、それらを慎重に扱いながら地形と深く関わりを持って生活していた。

しかし、現代では技術が発達し、人工的に平地をつくり、そこに住むことも可能である。それと同時に、地形によって住む場所を選ぶ必要がなくなった。その結果、どこに住んでも同じような場所に住んでいるように感じられ、自分の住んでいる土地への愛着心が薄れていくことが予想される。このような事態を避けるためにも、地形における空間の構成とその要素を明らかにし、その土地の地形、人の住みつき方、土地の利用方法などの土地の背景を考慮した開発を意識的に行っていく必要があるのではないであろうか。

本研究では、穿入蛇行した河川が分断されることによって形成される地形「環流丘陵」（図１）を対象として、地形内の空間の構成とその要素を分析することで、人々がこの地形をどのように利用し、どのように住みついてきたのかを明らかにすることを目的とする。

図１　環流丘陵地帯

２．対象地域

徳島県南部を流れる那賀川、その流域内の延野地区、大久保地区、横石地区に存在する３つの環流丘陵地帯を対象地域として調査を行った。（図２、３）

図２　那賀川

３．調査方法

本調査を進めていく上で、以下の２つの要素に着目した。

１）物理的な要素

建物の位置、田畑の位置、道のつき方等

２）人々の生活に関係する要素

地形のどの辺りから人が住みつき始めたのか等

１）については、住宅・田畑の位置などの地形の利用方法に関する調査と、周辺の神社からの環流丘陵の見え方に関する調査を行った。２）については、町誌や公図を利用して集落内の空間分節に関する情報を得るために字に関する調査を、また、集落内における旧家の位置などを知るために地域の住民を対象としたヒアリング調査を行った。そして、以上の調査から得た情報を国土地理院発行の地形図の中に書き込んでいき、土地利用図を作成し、これをもとに調査結果をまとめ、考察を行った。

図３　３つの環流丘陵地帯

４．調査結果のまとめ及び考察

ⅰ）地形の利用方法に関する調査

環流丘陵地帯に住んでいる人々は環流丘陵の山裾、旧河床部の平坦な土地、外側の山の緩傾斜面に住宅を建て、田畑を耕し、この地形に住みついている。一方で、環流丘陵自体には住宅や田畑が見られない。環流丘陵の周りにはそれを周回するように他の道よりも少し幅の広い道がつけられており、この道が集落内の主要道と思われる道である。また、集落内の墓地は外側の山の少し小高い場所にある。以上のことから、環流丘陵の山裾、旧河床部の平地、外側の山々の緩傾斜面が１つの空間単位として捉えられていることが考えられる。

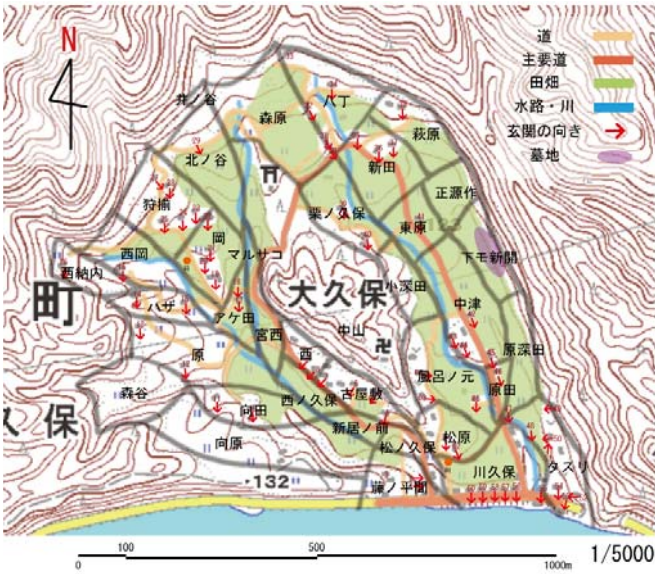

図４　土地利用図

ⅱ）周辺の神社からの環流丘陵の見え方に関する調査

対岸にある神社はその神社へと続く参道を含めて見た時に、その敷地内に他の山や樹木、建物に遮られることなく、環流丘陵を独立した丘陵として見ることのできる視点場を持つということが分かった。このことから対岸の人々は環流丘陵を何か特別な捉え方をしていたと考えられる。

図５　対岸の神社からの見え

ⅲ）環流丘陵の見え方に関する調査

環流丘陵地帯における字の分け方について、環流丘陵をほぼ真ん中で分割したり、中山という環流丘陵の地形を表す字名をつけたりするなどの傾向が見られた。また、集落内の道や水路・川に沿って境界が定められている様子も見られた。以上のことより、字を定める際に自分達の住んでいる地形やその利用方法に影響を受けていたと考えられる。

ⅳ）考察

今回行ったヒアリング調査では、人々が環流丘陵地帯のどの辺りから住みつき始めたのかを明らかにすることはできなかったのだが、ここで、古くから人が住んでいた土地には人名の字名がつけられていると仮定し、考察を行ってみた。

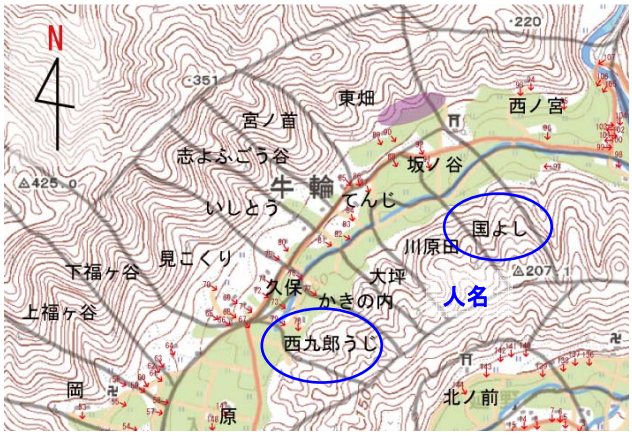

図６　延野地区大字牛輪

３地区の字の境界の定め方を比較してみると、人名の字名がつけられた字は４つあり、そのうちの２つが延野地区大字牛輪にあることが分かった。この地区では、他の場所と比べて字が細かく短冊状に分けられており、字の大きさもほぼ均一となっていることが分かる。なお、その一つ一つの字の幅は、平均約 165mとなっている。また、ほとんどの字が、平地と山がセットとなって構成されている。この事は、人々の生活の場と生活に必要な資源を入手する場がセットになっていると考えることができる。そして、字の多くが背後の山に尾根と谷を有しているということも見てとれた。